

授業実践を振り返って

—— グループワークの観点から見た予防的カウンセリング ——

報告者 センター助手 角 田 真紀子

学校臨床総合教育研究センター相談援助部門では、予防的カウンセリングやピササポートなど学校での機能的・効果的な相談援助について研究と実践を行っている。我々はこれまで5年間にわたって、開発的カウンセリング、予防カウンセリングなどの手法を取り入れた独自の授業構成において、グループワークによる生徒のコミュニケーション能力の向上を図ってきた。今年度は5年間の研究のまとめにあたり、筆者は、表題にあるような授業におけるグループワークの活用を中心に、教育心理学会主催シンポジウムにて実践報告を行い、教育学研究科紀要に執筆した。ここではそれらの要旨をふまえて述べたい。

思春期には、仲間関係が非常に重要である。グループワークは、思春期の仲間同士で行うことによって、さまざまな効果が期待できる。他者とのコミュニケーション能力のスキルアップはもちろん、仲間との関わりを通じて、他者と自分を比較し、自己を見つめる機会を提供するという意味で、自分自身とのコミュニケーション能力の向上も可能にする。そこで、我々は、授業でサブグループと呼んでいるグループでのワークを活用し、仲間から得られるピアサポートを得られやすい環境設定および授業実践を行っている。特に、グループサイズや、授業時間・空間への配慮をすることで、より生徒が快適かつ効果的に体験的理解を深められるようにしている。

授業におけるサブ・グループづくりは、毎回最初にくじ引きで行う。授業内容によって、男女混合／別にしたり生徒の興味・関心事別にグループを作ったりする。平均は4人グループである。

一回の授業の流れとしては、全体への指示（グループワークの準備作業）→個別作業（グループワークの準備作業）→サブ・グループでの共有（グループワーク）→全体での共有→全体への次の指示→サブ・グループでの作業→を繰り返す、最後に個別作業（理解の定着）を行っている。サブグループ活動を円滑に進めるためには、いきなりグループワークを行わずに、全体での話し合いを一緒に聞きながら、その雰囲気慣れてもらいつつ、グループに入っても自分が言える意見を持っている準備状態を作る個別作業を行うことが重要である。

このような手続きのなかで年間の授業が行われる。年間を通してのグループ過程を検討すると、5期にわけてその教育実践を述べるができる。

第1期は、グループ形成期における不安低減と凝集性を高めることが授業者側の中心的課題であり、対人関係でのコミュニケーションのパターンと方法を中心に授業を行ってきた。生徒は、コミュニケーションについて新しい視点やスキルを学びながら、グループワークに慣れていった。

第2期は、焦点を対人関係から「個人の内面的世界の領域」に移し、第1期同様サブグループで活動を行いながら生徒それぞれがさまざまな側面から体験的に自己理解を進めた。

第3期は、これまでの非自発的なサブグループとは異なった、類似した目標をもつメンバーからなるサブグループの活動期であった。類似した目標をもつメンバーがサブグループ活動を通して課題解決・意思決定をしながら進路選択を洗練させていくということが中心的な活動である。第2期までの、相互影響的な活動を発展させ、サブグループとしての決定や、さらには自己目標に対する意思決定を促していく過程である。

第4期は、これまで初期から少しずつ体験をしてきたものを生かし、個人がグループおよび授業者を通して自分を客観視し、自己理解を深めることのできる時期であり、サブグループ活動の発展期である。授業者側は、授業内容の領域を「社会的関係（コミュニティ）と自分」として、より広い視野での自己理解を進めることを目的とした。サブグループ活動としては、より自由度を高めたものであった。

第5期は、グループ活動の達成期である。それはまた、グループ活動および授業全体の終わり、別れの時期である。ここでは、授業全体を通して学んだことを確認し、「自己資源の確認・探索」として、ソーシャルサポートおよび自分の能力を確認する作業を行った。

ところで、教師の指導やカウンセラーの相談が「一対一」という従来の方法では、時間的にも、マンパワーも足りないのが現状である。そこで、教師の専門である「教える（教師）—学ぶ（生徒）」というスタイルの授業に、

カウンセラーが心理的知識を補助的に用いることで、この現状を解決しようというのが、この授業実践の試みである。授業は、実際の生活に即した課題設定により、「学びあう／創る（授業者と生徒、生徒同士）」というスタイルの授業が展開されている。これにより、学校に配置されたスクールカウンセラーを、特別な生徒にだけではな

く、広く一般生徒のこころの健康を高めるためにも活用することが可能となる。教師とカウンセラーの互いの専門性を生かした協働による授業は、生徒にはもちろん教師やカウンセラー、学校にとっても、得るものが多いと思われる。